

Infant Motor Delay and Early Symptomatic Syndromes Eliciting Neurodevelopmental Clinical Examinations in Japan

(日本における乳幼児の運動発達の遅れと ESSENCE)

執筆者

Yuhei Hatakenaka, Haruko Kotani, Kahoko Yasumitsu-Lovell, Keita Suzuki, Elizabeth Fernell, Christopher Gillberg

概要

【背景】

粗大運動発達の異常は、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、知的発達障害、発達性協調運動障害やその他の ESSENCE にも見られるとされている。しかし、2歳までに粗大運動の遅れで受診した子どもたちのコホートを臨床的にフォローアップした研究はほとんどない。粗大運動の遅れが ESSENCE の指標となり得るか、臨床的・前方視的コホート調査を実施した。

【方法】

粗大運動発達の遅れを主訴に、2歳の誕生日までに日本の神経発達センターに来所した子どもたちを1年後に追跡調査した。対象児は、ESSENCE の視点でフォローアップされた。

【結果】

30人の対象児のうち、28人(男児18人、女児10人)(93%)はESSENCEの範疇に含まれる診断がついた。粗大運動発達の遅れの病因が特定されたか、あるいはそれが強く疑われる15人の対象児のうち、13人(男児8人、女児5人)(87%)がESSENCEの障害や徴候を有していた。粗大運動発達の遅れの病因が分からない15人の対象児は、全員がESSENCEの障害や徴候を有していた。

【結論】

2歳までに粗大運動の遅れや異常があった子どもたちの大多数が、フォローアップされた後、ESSENCEグループに含まれる障害の診断基準を満たしたことが示唆された。粗大運動の問題を呈する子どもたちに対しては、粗大運動機能に関してだけでなく、広く臨床的なアセスメントとシステムティックなフォローアップが必ず必要であると結論付けられる。